

ユエンフォン・ウーン著

吉原和男監修 池田年穂訳

# 生寡婦 〈グラスウィドウ〉

—— 広東からカナダへ、家族の絆を求めて

風響社／2003年5月／557頁／3500円



## 河口充勇

### 背景

ディアスポラ (Diaspora) という概念は、本来、迫害を受けて離散を余儀なくされたユダヤ人の様子を表すネガティブなものであったが、近年では、ユダヤ人に限定せず、民族の離散・分散を表す語として、より広義に使用されるようになっていく。一九九〇年代以降におけるカルチュラル・スタディーズやポストコロニアル論の世界的な流行もあって、ディアスポラに関わる諸問題が注目を集め、関連の文学作品や学術研究が数多く発表されるようになった。なかでも世界中に散在する華僑・華人の激動の歴史は、近年における華人経済の急激な成長ともあいまって、ことさら大きな注目を集めている。本書『生寡婦(グラスウィドウ)』— 広東からカナダへ、家族の絆を求めて』も、そのような時代背景のなかで生み出された華僑・華人ディアスポラ文学／研究の一つであり、第二次大戦前にカナダ在住華僑の妻となった一人の女性が戦後初期の共産革命を背景とした政治的混乱を避

けるため故郷広東を離れ、香港、そして、夫のいるカナダ・ヴァンクーバーへと流転しながら家族とともに逞しく生きてゆく姿を描いた物語である。

### 著者略歴

著者ユエンフォン・ウーン（温婉芳）は香港に生まれ、香港で大学院修士課程時代まで過ごした後、カナダ・ヴァンクーバーのプリティッシュ・コロンビア大学（UBC）に留学している。UBCでの博士課程時代には広東からカナダに移民した人々の語りを通して共産革命以前の広東農村の親族組織に関する社会人類学的研究を行ない、その研究成果によって一九七五年にUBCから博士号（社会学）を授与されている。一九八〇年代以降には「改革・開放」下の広東において現地調査を精力的に行なっており、労働力移動や女性問題などを扱った著述を多数発表している。現在はカナダ西部のビクトリア大学にて教鞭をとっており、華僑・華人研究をリードするベテラン研究者の一人として重要な役割を果たしている。

### 本書の特徴

本書の特徴はまず何より小説の体裁をとったエスノグラフィという点にある。主人公のウオン・サウベンという女性に架空の人物であり、文中に登場するエピソードはすべて著者によるフィクションである。とはいえ、本書の記述は、著者の豊富な調査経験に裏付けられたものであり、その行間から社会人類学や社会学のエッセンスを読み取ることができる。それゆえ、本書は単なる一般向け歴史小説としてだけではなく、華僑・華人研究の専門書としても大変読み応えのあるものとなっている。

本書のもう一つの特徴は著者も主人公もともに女性であり、女性の視点から描かれたエスノグラフィであるという点である。従来の華僑・華人に関する文学作品や学術研究は圧倒的多数が男性中心に構築されたものであり、本書のように女性の視点が前面に出されたものは稀少である。本書はジェンダー論的視点から華僑・華人の歴史と現状を考えようとする

際に貴重なテキストとなるであろう。

### 本書の内容

本書は、主人公ウオン・サウベンの移動履歴に沿って、三つのパート、すなわち第一部「広東省台山県（一九二九年～一九五二年）」、第二部「香港（一九五二年～一九五五年）」、第三部「ヴァンクーバーのチャイナタウン（一九五五年～一九八七年）」から構成されている。第一部では、主人公サウベンが生まれ育った広東省台山県の村落社会の様子、結婚適齢期を迎えた彼女がヴァンクーバー在住の青年リヨン・イクマンと結婚したのも束の間、夫との離れ離れの生活を余儀なくされることになる経緯、さらに、二人の子（長男は養子、長女は実子）を抱えた彼女が日中戦争、国共内戦、共産革命と続く時代背景のなかで厳しい生活を耐え忍ぶ様子が事細かに描かれている。サウベンの故郷台山は一九世紀半ば以降に多くのの人々を海外（特に北米）に輩出してきた地域であり、そこでは、海外で働く男性たちからの送金に大きく依存した社

会生活が顕著にみられてきた。故郷を離れた男性たちは、いつか故郷に錦を飾ることを夢見ながら鉱山や鉄道建設現場の契約労働者として、あるいはチャイナタウンの限られたエスニック・ビジネス（飲食業・理髪業・洗濯業など）の担い手として過酷な肉体労働に耐えつづけた。彼らが外地で獲得した金銭の多くは故郷に送られ、家族の生活費用、土地の購入費用、家屋や墓の建設・修繕費用に当てられた。リオン家に嫁いだサウペンは、ヴァンクーパーのチャイナタウンで小さな中華レストランを営む夫と舅からの送金のおかげで経済的には不自由のない生活をおくることができたが、その代償として夫とともに過ごす時間の大半を失うことになった。本書の邦題になっている「生寡婦」とは、サウペンのように、長期間にわたって夫と会うことがかなわず、まさに生きながらにして寡婦同然の生活を余儀なくされた華僑の妻たちのことを指す、悲哀に満ちた言葉なのである。

そうした第一部の記述においては、伝統的な広東農村の社会構造に詳しい社会

人類学者である著者の見識が随所に散りばめられており、伝統的な儀礼や風習のあり方が概して女性の視点を通して詳細に描かれている。また、ここでは、伝統的な農村社会における身分差別のあり方に関する記述も多くみられ、第一部の後半部には戦後初期の共産革命によって形勢が逆転し、リオン家に隷属する奴僕として虐げられてきた男性がリオン家に対し積年の恨みを晴らす様子が極めてリアルに描かれている。そして、第一部のクライマックスでは、共産革命を背景とした政治的混乱のなかで身の危険を感じたサウペンが二人の子を連れて姉家族のいる香港に逃亡する様子が描かれている。

つづく第二部では、サウペン母子の香港での難民生活の様子が描かれている。当時の香港は、中国本土からの百万を超え難民の流入を背景に、難民シェルターの様相を呈していた。旧市街の既存住宅の収容力に限界があったため、当時の難民の多くは山腹の公有地を不法占拠し、ありあわせの材料で急場しのぎのバラック住居を建てた。そこでは電気・ガスは

いうまでもなく、公共の水道すら通っていないかった。生活用水を得るために毎日遠方まで足を運ぶ必要があり、その運搬作業は大変な労苦をとまなうものであった。また、生活廃水が垂れ流しにされるため住民たちは常に伝染病の危険にさらされていた。そうしたことよりもさらに住民たちを悩ませたのは火災の不安であった。公的な社会保障のない当時の香港において、いったん火災が発生すれば、住民たちはすべてを失うことを意味した。そのように厳しい生活環境に置かれた人々は、香港植民地政府を当てることもなく、故郷に戻れる日、あるいは安定した第三国に移住できる日を夢見ながら自助努力と血縁者・同郷者との助け合いによって過酷な生活を耐え忍んだ。サウペン母子が落ち着くことになった石硤尾地区は、そうした難民たちのバラック住居が特に密集したところであり、戦後香港社会史において象徴的な意味をもつ場所の一つである。そこで一九五三年暮れに生じた大火災とその後における香港

政庁のリセットメント政策は香港社会史上の重要な転換点であり、その辺りの事情についても本書のなかで詳しく記述されている。

第二部のクライマックスでは、サウペンが夫イクマンの呼び寄せによりヴァンクーパーに渡る様子が描かれるが、そこでは次のような印象深いエピソードがあげられている。香港に来てヴァンクーパーにいるイクマンとの音信を再開することができたサウペン母子は、ヴァンクーパーに呼び寄せられる日を心待ちにしながら露天で野菜を売って何とか食いつないだ。まず長男のキンボンがレストランでの労働力の必要から呼び寄せられた。その後、サウペンは結核に罹り、死線をさまようことになったが、その際には夫からの多額の送金により高価な治療を受けることができた。しかし、皮肉なことに、その金はイクマンが長女フェイインの出生届（実は男子として当局に申請）をレストランの共同経営者である親戚（イクマンの叔父）に売り払って得たものであり、そのためにフェイインのカナダへの移住の

途は閉ざされてしまった。フェイインの出生届を購入したイクマンの叔父はそれによって香港にいるヤクザ者の養子と呼ばせることができた。その事実を聞きかされたサウペンは夫に対し憤りを感じながらも為す術なく、結局、最愛の娘を香港に残したまま、一九五七年に夫イクマンと長男キンボンの待つヴァンクーパーに渡ることとなった。

さらに、つづく第三部では、ヴァンクーパーのチャイナタウンを舞台に、夫と十二年ぶりの再会を果たしたサウペンが未知なる世界での生活に戸惑いながらも家族に囲まれて生きてゆく様子が描かれている。新天地ヴァンクーパーでサウペンは新たに二人の子（次女ポーリン、次男ジョー）をもうけた。第三部はこのカナダ生まれの二人の子と母親サウペンとの間の世代的・文化的ギャップの様子がストーリー展開の中心に置かれている。一九六〇年代の北米では公民権運動の高まりという時代背景のなかで、エスニック・マイノリティの置かれる立場にも大きな変化がみられるようになった。もち

ろん、人種差別が根絶されたわけではなかったが、少なくとも表面的には人種差別に対する社会的規制が高まり、エスニック・マイノリティの生活水準も大幅に向上した。そうした時代背景のなかで成長した子どもたちは、移民一世として苦労を重ねてきた古い世代の生活様式や価値観を受け入れず、彼らの行動はサウペンを閉口させるものばかりであった。大学卒業後に実家を離れた次男ジョーは中国語を話せない現地生まれの華人女性と結婚することになったが、その結婚式の場で花嫁が身にまとった純白のウエディングドレスは、サウペンのような古い世代の人間には耐え難いものであった。というのも、白は伝統中国では不吉な色とみなされてきたからである。また、嫁のお産を手伝うために次男の住まいを訪れたサウペンは次男夫婦との育児に関する考え方の違いにも頭を悩まされることになった。また、ハイスクール時代の次女ポーリンは家業の手伝いを嫌がり、ボーイフレンドたちとのデートに明け暮れる毎日を送っていた。そうした娘の自由奔

放ぶりは、古い価値観に縛られて生きてきたサウベンには到底理解できるものではなかった。

一九六九年に夫イクマンは長年の重労働がたたって癌を患い、六十三歳でこの世を去った。夫の死の直前、香港に残してきた長女フェイインがその家族とともにカナダ移住を認められ、娘は生まれて初めて父の顔を見ることがになった。夫の死後、サウベンは長男キンボン夫婦と娘フェイインとともにチャイナタウンのレストランを切り盛りすることになった。その後も数々の苦難に見舞われたが、いづれも家族の一致団結の下で耐え忍び、リヨン家のレストラン・ビジネスは徐々に安定性を高めていった。四人の子、そして、六人の孫に恵まれたサウベンは故郷を遠く離れた異国の地で幸福な老後生活を送ることになった。

そして、第三部のクライマックスでは、七十歳を超えたサウベンが次女ポーリンを連れ立って三十五年ぶりに故郷台山を訪れる様子が描かれている。サウベン母子が帰郷した一九八七年ごろには、七〇

年代末に始まる「改革・開放」政策の下で広東の農村でも劇的な変化がみられていた。彼女の村には海外からの寄付により立派な建物が多く建てられており、文化大革命時代に破壊された祠堂の修築も行なわれていた。村人たちは「凱旋者」サウベンを羨望の眼差しで眺め、カナダ在住の男性を娘や孫娘に紹介してくれるよう彼女に請うのであった。その様子を目の当たりにしたポーリンは、自らと同年代の若い女性たちが旧世代と何ら変わらぬ遠く離れたカナダに非現実的な夢を馳せているという事実の理解に苦しんだ。そうして憤りを隠せない娘を前に母はただ一言、「カナダの方が金があるんだよ」とだけつぶやいた。六十年に及ぶウォン・サウベンの物語は、この印象的な一言で閉じられている。

### 本書の意義と限界

本書の意義は、まず何よりその分厚い記述というところにあるといえよう。それを通して読み手は、伝統的な広東農村、戦後初期の「難民シエルター」香港、北

米の旧いタイプのチャイナタウン、そして、「改革・開放」下の広東農村のそれぞれにおける生活様式や人間関係のあり方、さらには人々の世界観のあり方までを極めて詳細に思い描くことができる。また、スケールの大きさとということにもやはり本書の意義があるといえよう。まさに激動の華僑・華人の近現代が英文三〇〇頁弱（邦訳では五〇〇頁強）の単行本のなかに凝縮されており、しかも、そこでは華僑・華人史のなかで非常に重要な意味をもつ華南、香港、北米という三つの場所それぞれの象徴的エピソードが一つのライフヒストリーのなかでダイナミックに連結されている。読み手は具体的な物語を通して、それぞれの場所に関わる断片的知識がより大きな枠組みのなかで有機的につながってゆく心地よさを感じることができるのである。

そのように、本書は大変有意義な作品であるが、とはいえず、そこにおいて全く限界がないわけではない。評者は、本書が旧来の華僑・華人研究の枠組みからあまり大きく踏み出していないという点に

些か不満を感じている。本書のなかで描かれていた人々の姿は概して古い華僑イメージに合致したものであり、その意味で読み手にとつては非常に理解しやすいものとなっている。たしかにそこでは、先述のように、断片的知識が大きな枠組みのなかでつながってゆく心地よさがある。しかしながら、そこでは根本的な発想転換を必要とするような真新しさがみえてゆく心地よさがほとんどない。本書は、あくまでも古いタイプ（概して「もたざる者」）の移動に焦点を置き、一九八〇年代以降に顕在化する新しいタイプ（概して「もてる者」）の移動に関してはほとんど記述を行なっていない。評者のみたところ、そうした方面への展開の可能性がなかったわけではない。たとえば、三十五年ぶりの帰郷の際に香港にも立ち寄ったサウペンはそこで香港在住の姉家族と三十年ぶりの再会を果たした。姉は長年の苦勞の甲斐あって、子どもたちの経済的援助の下で悠悠自適の老後生活を送っていた。姉の子どもたちはみな高学歴・高収入の専門職あるいは企業経営者

として羽振りが良かった。残念ながら、本書においては、そうしたサウペンの甥姪たちの人生とその社会的背景に関する記述がほとんど行なわれず、サウペン母子はあつさりとして香港を通り過ぎていった。このサウペンの甥姪たちに代表されるような戦後の香港で生まれ育った世代は、実をいうと、単に戦後香港史においてだけでなく、広く華僑・華人史全般のなかで非常に重要な意味をもつ存在なのである。サウペンが香港を訪れた一九八七年度のころには、「一九九七年問題」に起因した先行き不安の蔓延を背景として若年ミドルクラスを中心に多くの香港市民（一九八〇年代半ば〜九〇年代半ばの十年間に約五十万人）が移住先国の国籍・永住権という政治的保険を求めて北米やオセアニアの国々に移住することになっていた。サウペンの住むヴァンクーバーは当時の香港系移民の最も重要な移住先の一つであった。そうした当時の香港系移民の多くは、旧いタイプの華僑（概して「もたざる者」）とは大きく異なり、様々な個人的資源（世界中で広く通用する学歴・資

格・技能・英語力・キャリア・人脈・資産など）を背景に厳正な能力審査をクリアし、移住先で高度な経済的・社会的適応を果たすことになった。そのような「もてる者」としての香港系移民にとつては、既存のチャイナタウンとそこに付随した相互扶助ネットワークへの依存は絶対的なものではなく、むしろ選択可能なものであった。彼らの多くはミドルクラス的な職業に就き、そして、ミドルクラス向け住宅地に居を構えた。それだけでなく、彼らの多くはあえて従来の生活様式を放棄（つまり、ホスト社会に同化）しようとしなかった。というのも、香港での彼らの生活は移住先での生活と同じように豊かでモダンなものであり、わざわざ変える必要に迫られなかったからである。さらに、彼らの一部は移住先に長く定着しようとしなかった。彼らの間では、男性たちが政治的保険の確保のために妻子を移住先に残しつつ、経済的機会の確保のために好況の香港に戻り、その後には妻子のいる移住先と仕事場のある香港との間を超遠距離通勤するという新しい家

族スタイルが生み出されることになった。そうして、一九八〇年代以降に香港を離れた人々の多くは、太平洋を越えて広がる香港経済圏・生活圏のなかで双方向的・多方向的に移動するようになった。そのような人々の移動のあり方を指し示す際に冒頭で触れたディアスポラ、あるいは移民といった「手垢」の付いた概念を不用意に用いてよいのかという問題については大いに議論の余地があるだろう。

いづれにせよ、サウペンの甥姪たちは、そうした新しいタイプの移動を現実的な選択肢とみなしえる社会的位置に置かれていたはずである。彼らはサウペンの夫イクマンに代表されるような「老華僑」とは様々な点で大きく異なっている。その意味で彼らの存在は、古い華僑イメージに囚われている読み手にとっては理解し難いものであるかもしれないが、そうした古いイメージをいったんリセットすれば、非常に興味深い研究対象でありえる。残念なことに、本書では、そうした新しい動きに関してはほとんど目が向けられず、そのクライマックスは、旧いタ

イブの移動が昔も今も変わらず続いているという事実が強調されて締めくくられている。本書は紛れもなく華僑・華人ディアスポラに関する一級の文学／研究であるが、とはいえ、それを通してみれば華僑・華人の近現代がすべてわかるというわけでもなさそうである。以上のような評者のコメントは、本書に対する批判というよりも、むしろ現代香港社会にこだわりつつけてきた評者の「無いものねだり」といったほうがよいのかもしれない。